The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国・内モンゴル自治区のトナカイエベンキ人のトナカイ飼育の現状
Author(s)	思, 沁夫
Citation	リトルワールド研究報告. 2000, 16, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25925
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国・内モンゴル自治区のトナカイエベンキ人のトナカイ飼育の現状

金沢大学大学院　思　沁夫

はじめに
1．調査地の概観
2．トナカイの自然サイクルとその管理
3．トナカイエベンキ人によるトナカイ利用
4．危機に瀕しているトナカイ飼育
おわりに

はじめに

本稿では中国内モンゴル自治区のトナカイエベンキ人のトナカイ飼育の現状（主に1990年代）について、つまり、開発、人口構成の変化、自然環境の変容、主流社会の文化支配、市場化などの影響によって、生業としてのトナカイ飼育、そして職業としての鹿茸の生産が直面している問題点を中心に記述し分析する。

1950年代に始まった大興安嶺の「全面開発」は、かつてエベンキ人、オロチョン人、ダフール人などの少数民族たちが生きてきた土地を、中国にとって不可欠の資源供給基地へと変えた。それから約40年を経た現在、ほとんどの住民は森から離れ、農業に従事するか、町での生活をするようになった。1996年1月1日に「大興安嶺の王者ーオロチョン民族は国の森林資源や野生動物を保護するために、代々引き続いてきた狩猟生活に終止符を打ち、文明（農業）の道へ足を踏み込んだ」、「これによって狩猟生活を送る民族はいなくなった」という記事がマスメディアを通じて全国に報道された（鄂倫春研究会 1996 P.53）。

この報道についてはともかくとして、実は今も大興安嶺の北西部山林にはトナカイ飼育と狩猟によって生きる200人程のトナカイエベンキ人の人々がいる。彼らも大興安嶺開発の影響を受け、その生業経済、生活や文化などは著しく変化した。かつて彼らはトナカイを交通手段として利用し、基本的には狩猟活動によって生活を立てていた（思 1999）。1960年代後半、中国で起きた政治変動の嵐の中で、トナカイは「公有化」され、社会主義計画経済によってトナカイの鹿茸が商品化された（民族郷資料室 1998 P.88）。しかし、1980年代初頭まで、トナカイエベンキ人にとって鹿茸の収入は重要ではなかった。彼らにとっては狩猟活動は最も重要な経済活動であるだけでなく、彼らのキャンプ地での社会生活、文化、信仰にとっても重要な意味をもっていた。彼らはバランスが取れた狩猟活動を行い、自然や動物を大切にする習慣が彼らの日常生活、文化、信仰などに多く反映されていた（思 1999）。1980年代に入ってから、「改革・開放」政策のもとで、新しい開発の波がこの周辺地域にも押し寄せた。森林の奥まで交通網が発達し、経済の活発化により人々の「野味」（野生動物の肉を好んで食べること、または漢方として利用すること）に対する関心が広い範囲の漢人の間にも高まり、これにともなって密猟者、違法の取引が氾濫し、この地域に多く生存していた野生動物は急速に減少、または絶滅した（陳 1993）。一方、トナカイエベンキ人が生活していた地域の原始林（大興安嶺に残る最後の原始林）は伐採され、自然環境が悪化しつつあった。この時期、この地域の政策面でも再度の大きな変化が見られた。1984年地方政府は「トナカイ放牧責任制」を導入した（民族郷資料室 1998 P.114）。それ以来、トナカイ飼育はトナカイエベンキ人のほとんど唯一の生活源となった。

中国のトナカイエベンキ人に関する研究文献は主に下記のようなものである。20世紀初頭までのトナカイエベンキ人に関しては、流放された官吏、探検家、民族学者

が残した漢文、ロシア語などの記録があるが、断片的なものしかない。20世紀初頭、ロシアの民族学者シロコゴルフが独特な概念（“文化複合”、“民族心理構成”など）に基づいて、ツングース研究の古典とも言える業績を築き上げた。1930年代から終戦までの間、日本の植民地になった満州国における民族研究は多く見られるが、そのうち、今西錦司編の『大興安嶺探検』（朝日文庫版）と永田珍馨の『北方騎馬民族オロチョン』（毎日新聞社）の2冊の本の中には、当時のトナカイエベンキ人の生活、経済などについての記述があり、民族資料としては価値が高い。中国解放後（1949年）、中国の少数民族社会歴史調査シリーズの一環として存在する『鄂温克族社会歴史調査』（1986年）は、中国語の文献としては最も重要[1]である。しかし1960年代以来今日まで、1993年の中国社会科学院院長プロジェクトの成果である『エベンキ民族社会問題調査報告書』以外中国では、ほとんど新しい研究がなく、空白な状態が続いている。日本では1980年代の半ばごろ、民博の大塚和義がいち早く現地に赴いてフィールドワークを行っており、そのエベンキ民族、オロチョン民族などに関する民族誌はトナカイエベンキ人などを研究する上で貴重な資料となるだろう（大塚和義 1988）。

私は1996年から1999年にかけて4回にわたり、トナカイエベンキ人について現地調査を行った。時間的に見てけっして長くはない（合計6カ月）が、政府関係や個人からの未公開の文献資料を集めることができた。また一方でトナカイエベンキ人と生活をともにし、若者から年寄りまでのいろいろな年齢層の人達から聞き取り調査もできた。19世紀末から1960年代までのトナカイエベンキ人の社会経済変化については既にこれらの資料を用いてまとめた（思 1999、 2000 ）。本稿もその調査報告の一部をなすもので、トナカイエベンキ人の現状についての資料の乏しい現段階で一定の意義をもつと考える。

1． 調査地の概観

①トナカイエベンキ人とは

トナカイエベンキ人とは中国民族分類上の「鄂温克民族」（エベンキ）の一部分である。1957年にエベンキ人の主張により、彼らの自称である「エベンキ」が正式の民族名となった（哈赫爾 1991 P.130～135 ）。トナカイエベンキ人の伝説によると、300年前まで彼らはレナ川流域で、狩猟（主な狩猟対象はソックチョウー“野生トナカイ”）漁労（サケ、コクチマス、カモグチなど）とトナカイ飼育（交通手段として）により生活を営んでいた。17世紀頃、ロシアがシベリアに侵入し、トナカイエベンキ人は彼らの支配下におかれた。ヤサク（毛皮税）の支払い、氏族首長を利用した間接統治、ロシア正教の導入、黒テンなど毛皮交換によって、トナカイエベンキ人の従来の生活形態は変化されつつあった。ロシア人、ヤクート人の圧力を感じ、トナカイエベンキ人は新しい猟場を求めて南へ移動を繰り返した。18世紀初め頃、彼らはアムール川をわたり、大興安嶺の「獲物の豊富さに驚き」（ニューラーシャーマンの詩より）、こ

の土地を新しい生活の場所にした（思 1999）。

1930年代から終戦までの間、彼らは日本の植民地下におかれ、1940年代後半からは中国の社会主義国家に統合された。政府は1957年にかつてトナカイエベンキ人とロシア商人、漢人商人と毛皮交換を行う場所だった奇乾町に民族郷を設け、それを拠点に民族政策の実施を図ろうとした。1960年代初頭、中ソ対立をきっかけに、トナカイエベンキ人と民族郷は強制的に内陸地域へと移転され、1965年に新しい居住地として現在の敖鲁古雅民族郷が建設された。1994年の中国のセンサスによると、エベンキ民族の総人口は26,315人であり、中国の55少数民族の中で人口が最も少ない民族の1つである。エベンキ民族は主に内モンゴル自治区、黒龍江省などに分布しているが、そのうち86.7%に当たる22,821人が内モンゴル自治区ホロンバイル盟に集中している（呼倫貝爾盟民族事務局 1999 P.225）。全盟総人口の0.1%しか占めていないエベンキ民族の人口は、ホロンバイル盟の各地に分散している（表—1を参照）。エベンキ民族の言語はアルタイ語族の一分枝であるツングース・満州語群に属するエベンキ語であり、文字はもたない。エベンキ語にはいろいろな方言が見られる。例えば、中国エベンキ民族にはホイ方言（索倫方言ともいう）、チン方言（ツングース方言）とオルグヤ方言（トナカイエベンキ人が使う言葉）という3つの方言があるといわれる（朝克 1995 P.195）。エベンキ民族内部の違いは言語だけにとどまらず、経済生活、文化などの分野にもおよぶ。ホロンバイル盟地方のエベンキ民族を生業から分類すると、莫力達瓦ダフール民族自治旗、阿栄旗などに住んでいるエベンキ人は漢民族の影響を受け、農業または“半農半牧”に従事する人が多い。エベンキ民族自治旗、陳巴爾虎旗、すなわちホロンバイル草原に暮らすエベンキ人はモンゴル人の遊牧文化を早くから取り入れ、牧畜業を営むようになった。本稿で扱うトナカイエベンキ人の場合は、トナカイ飼育、狩猟という従来の生業経済が、著しく変化されながら

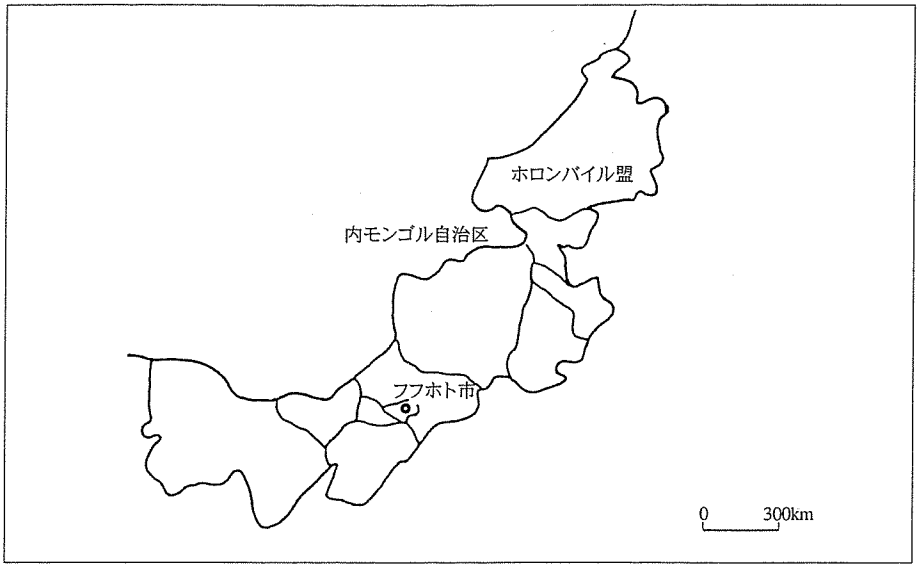
表—1　ホロンバイル盟地域別のエベンキ民族人口分布（1990年）

エベンキ民族自治旗	8,621
ダフール民族自治旗	4,423
オロチョン自治旗	2,959
陳巴爾虎旗	1,867
阿栄旗	1,866
扎蘭屯市	983
海拉爾市	601
根河市	351
扎牙克石市	340
新巴爾虎左旗	109
新巴爾虎右旗	76
額爾古納市	69
満州里市	56
合　計	22,821

出所：呼倫貝爾盟民族事務局

も継承されていると言えよう。

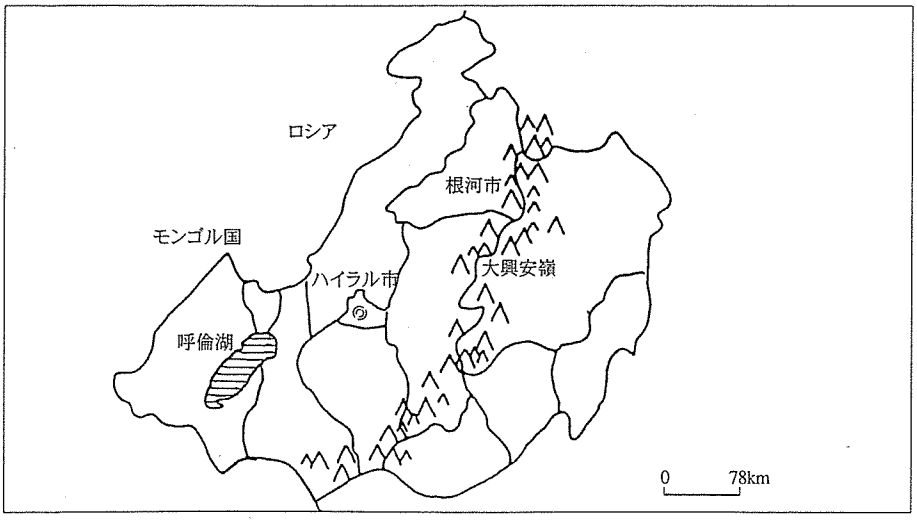
図—1　内モンゴル自治区



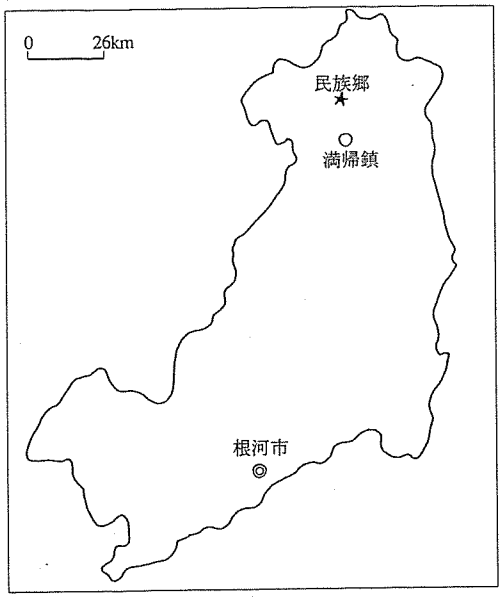
②敖魯古雅エベンキ民族郷

敖魯古雅エベンキ民族郷（以下民族郷と略す）はホロンバイル盟根河市の一番北部に位置し、満帰林業局（内モンゴル自治区大興安嶺林業組織の一番北に位置する生産部門）の所在地満帰鎮（町）から17キロ離れたところにある（図—1、2、3を参照)。民族郷の面積は1,096平方キロメートルで、そのほとんどが興安カラマツ、白樺、樟子松などから構成される森林に覆われている。「森林鉄道」は満帰鎮まで伸びているが、そこからは「林道」を使うことになる。一本800メートルぐらいの道が民族郷

図—2　ホロンバイル盟



図—3　根河市



を2つに分けている。道路の西側にあるのは民族郷政府の建物、住宅区と2つの「郷鎮企業-木材加工場と酒場（酒を造る工場）」である。東側には“狩猟民”の住宅地、民族学校とエベンキ民族狩猟文化博物館がある。博物館と並んで郵便局、銀行（支所）があり、民族郷の市場とつながる。また、1980年代後半からは民族郷のあちこちに「小商店」、「小吃部」（小さいレストラン）が散らばっている。これらの店の経営者はほとんど漢人である。1994年以降国や地方政府の援助で、住宅地に電話が配置され、テレビも見られるようになった。また、民族郷はその美しい自然とトナカイエベンキ人のユニークな文化によって、内モンゴル自治区の観光名地に指定された。

表—2　民族郷における民族別の人口（1999年）

民族	漢	エベンキ	モンゴル	ダフール	ロシア	合計
人口	312	212*	33	8	4	569
総人口に対する割合	54.8%	37.2%	5.7%	1.4%	0.7%	100%

＊そのうちトナカイエベンキ人が167人、外から来たエベンキ人が45人。　　出所：民族郷公安部門調べ

民族郷の統計によると、1999年の時点で民族郷の総人口は569人である。これを民族別で見ると表—2の通りでトナカイエベンキ人は51世帯167人である。

トナカイエベンキ人の人口は生業面からは3つの部分に分けられる。すなわち、民族郷で働いて生活しているのは19世帯69人、「承包戸（トナカイに頼って生活する人たち、すなわちトナカイ放牧者とその家族）」19世帯62人と「困難戸（定常的な仕事がなく政府の援助金で生活している人たち）」13世帯36人である。

民族郷で日常的に話されている言葉は漢語である。エベンキ民族学校とはいえ、1950年代スタートした時点から学校教育は漢語によって行われてきた。人口構成の変化などの原因もあり、現在トナカイエベンキ人の中で、日常用語としてエベンキ語を使うのはほとんど40歳以上の人たちに限られる。特に20歳以下のトナカイエベンキ人のうち80%程度の人たちはエベンキ語を話せない。

1950年代に共産党の民族政策によって作り上げられた「吃皇粮」（上の援助により運営する）という財政構造はいまもほとんど変わりがない。2つの「郷鎮企業」がある

が、どちらも赤字が続いている。1994年以降「地方の税金で地方政府を養う」という中央政府の方針を導入したことにより、ホロンバイル盟、根河市の財政が困難な状態に陥いっているため、民族郷への援助金もそれにともない年々減少している。現在民族郷政府は財政を自立させるという大変厳しい課題に迫られている。

③トナカイエベンキ人のキャンプ地

表—3　トナカイ放牧契約者の基本データ（1999年）

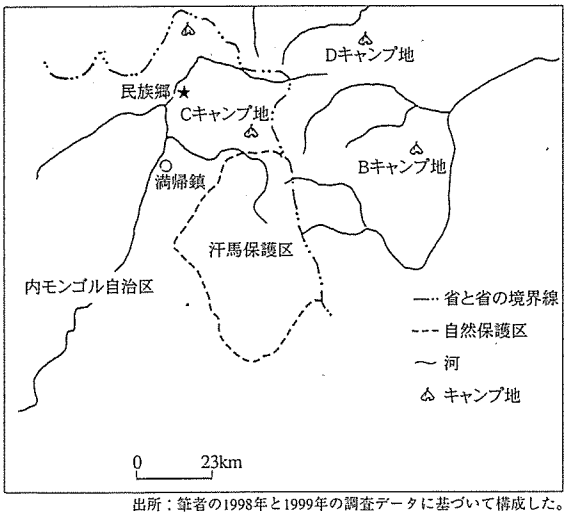
契約者	年齢	世帯数人数	最初契約した年	現在持っているトナカイの数	1999年のトナカイによる収入（単位:元）	その他の収入（あり○,なし*）	備考
1,a	51	5	1984	99	☆27,650	*	
2,b	72	3	1984	51	9,870	*	※
3,c	35	4	1987	47	☆11,754	*	
4,d	41	4	1989	43	☆12,644	*	
5,e	47	4	1987	37	8,864	○	
6,f	58	5	1987	48	☆9,976	*	
7,g	30	3	1997	28	4,451	*	
8,h	32	2	1992	28	☆9,635	*	
9,I	72	3	1984	39	5,888	*	※
10,j	50	2	1984	22	3,021	*	※
11,k	58	5	1987	16	5,975	○	
12,l	37	2	1989	25	4,113	*	
13,m	28	3	1994	19	2,412	*	
14,n	42	4	1989	31	4,346	○	
15,o	70	3	1984	13	1,787	*	※
16,p	48	4	1993	9	3,240	○	
17,q	37	3	1995	9	903	*	
18,r	68	1	1984	12	944	*	
19,s	56	2	1984	9	765	*	
				合計　585	合計　128,238		

注：※は1984年「責任制」導入する前からトナカイ放牧者であった。　出所：民族郷政府の統計データをもとに筆者が作成
☆は収入の中にトナカイを売った収入が含まれていることを意味する。

1998年10月に民族郷の狩猟公司と「トナカイ放牧契約」（契約の具体的な内容は3—②のところで説明する）を更新したトナカイ放牧者は19世帯である。具体的なデータは表—3の通りである。

トナカイエベンキ人の場合、トナカイ放牧を契約した人全員が森の中でトナカイを飼育しているわけではない。そのうち1999年夏の

図—4　トナカイエベンキ人キャンプ地の分布（1999年8月の時点で）



出所：筆者の1998年と1999年の調査データに基づいて構成した。

時点で31人が1年の大半を山林のキャンプ地で過ごし、自分のトナカイと放牧を頼まれた親戚のトナカイ、合わせて585頭のトナカイを4つのキャンプ地に分けて、放牧している。4つのキャンプ地の位置とキャンプ地の人口構成は図—4と表—4の通りである。ただし、彼らは常に移動の生活を繰り返しているため、正確なキャンプ地、トナカイ放牧範囲を確定することは難しく、これらの図、表は大まかなものに過ぎない。

表—4　1999年夏時点でのキャンプ地の人口構成と放牧範囲

キャンプ地の名前	人口（男，女）		トナカイの数	放牧範囲（単位：ha）	備考
	男	女			
Aキャンプ地	4	5	196	11,700	夫婦1組
Bキャンプ地	7	7	247	45,000	夫婦2組
Cキャンプ地	3	3	94	10,000	夫婦1組
Dキャンプ地	1	1	48	3,000～5,000	夫婦1組

出所：漠河林業局、民族郷狩猟公司調べ

2.　トナカイの自然サイクルとその管理

トナカイは寒い地域で生活するのに適した体質をもっているため、その分布の南限は永久凍土の南限を越えることがないといわれている。あるロシアのエベンキ研究者によれば中国のエベンキ人は「数世紀前、エベンキ人はトナカイの群れをともなってアムール川流域にやって来て、その河口地方から南へ侵入した。しかしその地方はトナカイ牧畜の条件に恵まれず、遊牧民たちはトナカイを失うか、ごくわずかな頭数を飼養するにすぎなくなってしまった」とある（B.A.トゥゴルコフ 1981 P. 52）。このような地理的な条件によるものかはまだ明らかになっていないが、大興安嶺にきたオロチョン人や他のエベンキ人はトナカイを失い、新たな生業を取り入れたのに対し、トナカイエベンキ人はさまざまな試練を乗り越えて今日までトナカイ飼育という生業経済を維持して来た。

トナカイエベンキ人が飼っているトナカイはシベリアのトナカイと比べて、体格的には小柄である。それでも、20～30キロの荷物をのせて1日30～40キロは歩ける。平均寿命は20年程度と推定されているが、病気による死亡率はシベリアよりはるかに高いといわれている（陳兆京 1993 ）。トナカイエベンキ人はトナカイが年中自分でエサをあさる、いわゆる「自由放牧」を行っているが、近年、野生動物を捕るために山林中にかけられた罠（ほとんどが林業局の社員がやっている）にトナカイがかかり、足を無くしたり、早く発見しないと死んだりするケースが急増している一方、盗難、交通事故も増えているため、ほとんど毎日見張りを必要としている。

◇トナカイ飼育の１年のサイクル

トナカイエベンキ人のトナカイ飼育は自然の通年のサイクルとトナカイとの関係、

そしてそれに合わせての人間活動によって規定されている。このようなサイクルは遠いむかしから行われて来て、あまり変化がないように見えるが、実はいろいろな変化を伴っている。例えば、トナカイの利用方法や環境の変化によっての放牧方法の変化がそれである。特にかつては季節のサイクルが彼らの生活のリズムを作り、大きな意味をもっていた。しかし、今はそのサイクルは文化的な意味を失いつつある。また、開発イデオロギーの影響下で若者を中心に、そのサイクルは経済的利益を生み出すものとしてのみ認識されるようになりつつある。ここでは、1990年代に入ってからのトナカイ飼育の1年のサイクルを整理してみた。

1月　この地方の最も寒い時期である（−50度C以下になる）。牡トナカイの角は脱落を続けている。エサ[2] はオンコンというコケが中心だが、柳樹、白樺樹などの枝の先端部も食べる。群れは遠くまで移動しないため、管理には手がかからない。

2月　早く角が脱落した牡トナカイには柔らかい角が生え始める。他は1月とほとんど同じである。

3月　山の日向側では、昼に溶けた雪の表面が夜になると再び凍ってしまうので、トナカイの足の部分が傷つきやすい。それへの対策が管理のポイントとなる。

4月　上旬、トナカイの出産準備のため、水場が近い、コケも豊富な場所を探して移動する。下旬、トナカイは出産のシーズンに入る。出産に近い牝の首に棒をつけておき、キャンプ地から遠く離れないように工夫する（それには2つの理由がある。1つは仔トナカイの安全のため、もう1つはキャンプ地で産んだトナカイは人間を恐がらないためという）。仔トナカイはオオカミ、クマなどの肉食動物にねらわれやすいし、また河に落ちて溺れて死ぬ危険性もあるので、毎日の見張りが必要である。

出産前後、牝トナカイの角が生え変わり始まる。

5月　出産のピークを迎える。エサはコケ類以外に木の新芽、草も食べる。冬毛が夏毛に変わり始める。出産後2週間で牝トナカイから乳搾りをするようになる。

6月　毎日カ、ブヨなどからトナカイを守るため、焚き火を用意する。

気温が上昇し30度Cこえることもしばしばあるので、水場に近い、風通しがいい場所を選んで移動する。下旬、鹿茸を切る作業がスタートする。

7月　下旬、鹿茸を切る作業が終わる。トナカイは病気にかかりやすいため、1週間1回の健康チェックが必要である。また、森林の虫害を防ぐために撒いた薬をトナカイが食べて死ぬ事故が多発しているので、毎日の放牧地への誘導が必要となる。

8月　中旬以後大好物のキノコを求めて、トナカイは小さなグループを作って広範囲を移動するため、管理は大変難しくなる。

9月　朝と晩は冷え込む。トナカイは交尾期に入る。牡トナカイは小さな群れを作

り、あちこちに移動するため、被害[3]が最も多発する時期である。昼は牝を柵の中に入れ、夕方から放牧する。中旬以後は焚き火がいらなくなる。下旬には夏毛から冬毛に変わり始める。

10月　交尾期が終わる。エサはコケ類が中心となる。仔トナカイに栄養つけるため、乳搾りはほとんど停止する。管理には手がかからない[4]。

11月　季節は冬シーズンに入る。管理は10月とほとんどかわらないが、「過冬点」[5]を探さなければならない。近年温暖化の影響で、地面に積もった雪が溶けるという現象が起き、放牧に新しい困難をもたらしている。

12月　牡トナカイの角が脱落し始める。

3. トナカイエベンキ人によるトナカイ利用

1950年代から今日まで、トナカイエベンキ人のトナカイ飼育を大きく3つの段階に分けることができる。1967年までは、トナカイ飼育は従来の特徴を多く維持していた（詳しくは思 1999を参照）。1967年から1984年までは、中国の社会主義経済に統合されることによって、トナカイは「公有化」され、鹿茸は商品化された。鹿茸は中国の漢方薬、特に栄養剤に欠かせない材料である。明時代の有名な本草学者李時珍はその漢方薬の百科事典ともいえる代表作『本草綱目』の中で鹿茸についてこう述べている「…筋骨を強くする。精髄を作り出し、精力をつける。血を養う、陽性を増す」(李時珍 1995　P.159)。鹿茸からの収入は狩猟収入ほどには重要ではなかったが、安定していた（1967年に国が定めた鹿茸の買入価格は1982年までほとんど変わらなかった)。一方、トナカイエベンキ人のシャマニズム、習慣、伝統文化などにたいする批判、学校教育システムの導入、主流社会の文化影響などによって、トナカイ飼育のもつ文化的、イデオロギー的な価値は次第に衰退しつつあった。1984年以後、特に1990年代に入ってから、鹿茸の収入は一部のトナカイエベンキ人にとって、唯一の収入源となった。トナカイは交通手段としての役割と文化としての価値を失い、現金収入を得る手段としての動物へと変貌した。

トナカイエベンキ人の自給的トナカイ利用には、主には交通手段としての利用、トナカイの乳の栄養源としての利用、そして婚資、儀礼（シャーマンの)、葬儀での利用などの内容がふくまれる。

交通手段としての利用とは、移動の際に荷物の運搬（トナカイの背に毛皮を敷いて、毛皮で作った特別な容器をそのうえに載せる)、乗用（主に老人、子供、たまに婦人も）としての利用をいう。1980年代以前、トナカイエベンキ人の荷物とは2～3月分の食料、簡単な食器（ほうとんどは自分で白樺の皮でつくったもの）と衣服であった。テント用の棒や毛皮製、白樺の皮製の覆いなどはキャンプ地においていった。他のキャンプの人が使うか、いつか戻ってくるときに再び利用することが多かった。1つのテントに25頭ぐらいのトナカイがあれば、荷物を運ぶにも、人間が乗る

のにも十分だったと彼らはいう。また狩猟にもトナカイは欠かせない存在であった。「もしトナカイがなければ、われわれはもう狩猟民ではなくなるだろう」と人々はいう。トナカイエベンキ人の主な狩猟対象はヘラジカとアカジカである。250～300キロにも達するこの大形な動物をキャンプ地まで運ぶには、人間の力では無理である。そのため、トナカイエベンキ人は狩猟に出掛ける時、かならずトナカイを連れてゆく。つまり、獲物を運ぶためにトナカイは使われる。彼らは狩猟には20～30頭が適切な数字と考えているようだ。1980年代初頭まで、キャンプ地の移動だけではなく、彼らはトナカイをつれて民族郷、満帰まできて、買い物していた。しかし、林道網の発達、新しいテント用具や鉄製のストーブ（どちらもトナカイには重すぎる）の導入、市場化による合理主義の浸透などの原因によって、トナカイの交通手段としての機能は衰退し、近年は完全に利用されなくなった。移動には主に自動車が用いられるようになった。

かつてトナカイは婚資としても利用されたし、文化的にも重要な意味をもっていた。「トナカイは宗教上の儀式において、人間と神との媒介者として甚だ重要な役割を演ずる。死者の霊魂があの世へ行くのに利用されるのである。「憑代」（placings for the spirits）を運搬し、それ以外に何の任務をもたない特別のトナカイがいた。トナカイはまたツングースの民間伝承にも重要な働きをなしている。これを鉄砲で殺すことは禁じられている」（シロコゴルフ 1941 P.63）。しかし今キャンプ地では、たまに訪ねてくる民族学者、博物館関係の人などが特別に頼んでやってもらう以外に、儀礼としてのトナカイの利用はほとんど見られなくなった。以下では1990年代におけるトナカイエベンキ人のトナカイ利用のありかたを見てゆく。

①自給的トナカイ利用

エベンキ人はシベリア諸民族（トナカイエベンキ人の故郷もシベリアである）の中で、唯一牝トナカイから乳搾りする民族といわれている。ただし彼らはチーズを作る方法は知らない。エベンキの乳利用の体系は固有のものなのか、それともモンゴル民族の影響なのかはまだ解明されていないが、乳利用の歴史は長く、彼らの食生活に欠かせない栄養源であることは明らかである。

トナカイエベンキ人は毎年の5月から10月にかけて、3才以上の牝から乳搾りをする。搾乳は1日1回で午前に行うことが多い。7月と8月は乳の出る量も多く、しかもおいしいといわれるが、その季節でも乳量は1日わずか400～500ｇである。しかし牛乳と比べてはるかに濃く、脂肪が多い（これはキノコと関係あるとトナカイエベンキ人はいう）。トナカイエベンキ人はトナカイの乳を主に下記の方法で利用する。a.紅茶の中に入れて、ミルクティー作って飲む。生水もほかの茶も飲まない彼らにとってはトナカイの乳で作ったミルクティーこそ毎日の生活に欠かせない飲み物である。b.レーバー（エベンキ式焼きパン）を作る時入れるか、またはうどんなどに入れ

て食べる。c.生乳をそのまま飲用とする。

②鹿茸生産—唯一の現金収入として

1984年に地方政府と民族郷政府は全国的政策である「承包責任制」（請負経営責任制）の影響下で、長い間実施してきた「工分制」（労働点数制）に終止符を打ち、「トナカイ放牧承包責任制」（承包制と略す）を導入した。この承包制には2つの原則がある。1つはトナカイの“所有権”と“使用権”を分離することで「狩猟業聯社」が民族郷政府を代表して“所有権”を管理する。トナカイの“使用権”は契約した放牧者に与える。1つは新しい分配方法ー「按労分配」（労働の質と量によって利益を分配する）を導入する。これらの原則に従って、トナカイを放牧したい人と狩猟業聯社とが契約書を結ぶ。契約書は下記のように3つの内容から構成する。a.山林に入ってトナカイを放牧することができる人なら、男女問わず誰でも放牧権がある（しかし1つの前提がある:放牧者は“狩猟民”[6]ではなければならない）。b.1人の放牧者が放牧できるトナカイの頭数は30頭である。c.利益は放牧者と狩猟業聯社が6対4の割合で分配する。しかし、狩猟業聯社が放牧者のためにいろいろなサービスを提供するのが条件である。

Ⅰ．承包制の更新

1993年10月に行われた「狩猟民大会」で放牧者たちは、分配方法の見直しとキャンプ地に対するサービスの改善を民族郷政府に求めた。それに応じて、政府は承包制を導入して丁度10年目をむかえる1994年の春に、今まで実施してきた契約を更新した。その具体的な内容は下記の通りである。a.1984年に確立した2つの原則は依然ととして有効である。b.原則として契約者はいま以上に拡大しないが（トナカイの数が足りなくなったのが原因と言われている）、世帯内部での調整は許可する（しかし他に仕事がないのが条件である）c.狩猟業聯社の名称を「狩猟公司」とする。そして狩猟公司は民族郷政府の指導は受けるが、経済的には完全に独立した法人となる。組織の性質の変化によって、民族郷政府から給料をもらっていた4人の幹部も「社員」となり、合わせて8人の社員は狩猟公司の被雇用者となる。それまで林業局からトナカイエベンキ人のために提供していた5万元の援助金が、以後は狩猟公司の「事業費」として使われる。d.鹿茸収入の分配比を6対4から7対3にする。つまり、放牧者が7で狩猟公司が3である。e.原則として放牧者はトナカイを売ることはできない。しかし、鹿茸の収入は安定しなくなったため、最低限の生活水準を保証するという目的から、「正式な手続き」（意味は不明）を通して、民族郷政府と狩猟公司の許可を得た場合、売ることができる（現地ではトナカイは売りやすく、牡1頭は8000元ぐらい、牝1頭は5000元ぐらいの値段で売られている。トナカイを売ったお金は狩猟公司と契約者が半分ずつもらう。買い手は主に動物園、吉林省にある漢方薬の会社、現地の漢人

が多い)。

Ⅱ.「鋸茸」(鹿茸を切る)、加工と販売

鹿茸を切る作業は狩猟公司の人がキャンプ地の男性放牧者の協力を得て、毎年の6月から7月にかけて各キャンプ地で行われる。平均的に言って、牡1頭からは6～7キロ、牝1頭からは4～5キロの鹿茸が取れる。鹿茸は「骨化」(硬くなる)する寸前が一番質的にいいと言われているが、それを見分けることは容易ではない。ここの場合は基本的に牡トナカイから先に切る。具体的なやり方としては、まずトナカイを倒す。そして1人がそのトナカイの後ろの2本の足を引っ張り、トナカイを立ち上がらないようにする。1人はトナカイの前半身の上に座り、前足を押しながら首の部分を固定する。最後に、1人が鋸で鹿茸を切り取る。1990年代初頭までトナカイを2つの棒の間に挟んで鹿茸を切る方法がよく使われていたが、最近ではこのやり方はあまり見られなくなった。このやり方はトナカイにとって非常に安全であるにもかかわらず、現在作業を行なっているひとたちは「面倒過ぎる」という理由でやめたらしい。6月の大興安嶺の気温は相当暑く、いろいろな病気に感染しやすいため、感染を防ぐ措置を取らなければならない。彼らが取っている措置は、鹿茸の根底部分をたくさんの血が出ないように細い縄でしばっておく。鹿茸を切り取ったあとは灰を切り取った部分に塗る。近年は外傷感染を防ぐ薬を注射する方法も使っているが、注射用の薬が高いため注射はからだの弱いほんの一部のトナカイに限る。

狩猟公司の建物は2階建てであり、1階がオフィスで2階が鹿茸加工室である。各キャンプ地から集められてきた鹿茸はすべてここで加工される。1980年代まではすべてが手作りであったが、いまは乾燥機なども設備されている。生の鹿茸から製品となるまでは2カ月ぐらいの時間が必要と言われている。具体的な作業は下記のように行われる。a.鹿茸を大きさによって大、中、小と分け(これは煮る時間と関係がある)て湯で煮る。時間は3分間程度である。b.日の当たらない、風通しがいい部屋で1週間ぐらい干す。c.さらに乾燥機で乾燥させる。このような過程を6～8回繰り返すと完成するようである。1500ｇの生鹿茸からは500ｇの乾燥した鹿茸ができる。一時的にスライスして売っていた(値段がちょっと高くつく)が、いまは買い手の要望に答えるため、できたものをそのまま売る。

1980年代後半まで狩猟公司は根河市の対外貿易公司を通じて、販売をおこなっていた。1990年代に入って、対外貿易公司は事実上解散させられたため、狩猟公司は直接販売するようになった。1967年に対外貿易公司が鹿茸を買い付けることによって初めて鹿茸が商品化され、1984年以降は鹿茸の販売の紹介役を担い、社会主義計画経済の一環として維持されて来たこのような関係は、これによって断ち切られた事となった。

中国ではトナカイの鹿茸の産地はこの1か所しかない(そのためであろうかトナカ

イは国の“2類保護動物”に指定された)。1990年代半ばまでは買い手が自らやってくるという非常に気楽な販売であった。当時の主な買い手は、韓国に漢方薬の原材料を販売することを目的として仕入れする個人、深圳市にある漢方薬を扱っている会社と黒龍江省の斎斎哈爾市のある「医薬公司」であった。しかし、世界的な自然保護意識の高まり、「ワシントン条約」による野生動物やその製品の取引の禁止などによって、鹿茸などを使った栄養剤の海外への輸出は難しくなり、次々と開発される新しい栄養剤の市場拡大、シベリア鹿茸の中国市場への参入などの原因も加わって今は非常に売りにくくなっている。1998年から狩猟公司は1人の社員を派遣し、中国東北地方を中心に販売を行っている。

Ⅲ. 狩猟公司と狩猟民大会

すでに触れたように、狩猟公司はトナカイ放牧者と契約を結ぶ相手であり、同時に契約の実施を担う責任者でもある。契約書から見て、狩猟公司は主に下記の仕事を行わなければならない。鹿茸の生産、加工、販売をする、契約者の放牧中の移動のための自動車を提供するなどである。

狩猟民大会は毎年の10月に行われる。根河市政府の民族郷と関係ある組織の責任者、民族郷政府の責任者、狩猟公司、トナカイ放牧契約者とその家族全員が参加し、1年の契約の実施状況を評価し、各契約者の鹿茸による収入を公布するなどがその内容である。

下記は1997年10月3日に行われた狩猟民大会の主な内容のまとめである。

a.シベリアのエベンキ民族などの鹿茸が中国市場に参入してきたため、鹿茸の値段は1996年の500ｇ800～900元から1997年には400元～450元まで激減した。これらの情報をまったく把握していなかった狩猟公司は1996年に500ｇ平均850元で売った値段より50元高い価格を予測していたが、結局買い手は現れなかった。地方政府と民族郷政府も一部分の金を出し、契約者の損失の30%を支払うことを約束した。

一部分の契約者は狩猟公司から完全に独立すると言い出したが、ある50代の女性契約者が言ったように「市場は悪魔だ」、その市場に彼らは無力を感じたのか、ほとんどの人はその意見に同意しなかった。

b.4世帯が放牧している群れから12頭のトナカイを売り、その金の半分がそれぞれの世帯に交付された。

c. 狩猟公司はキャンプ地の移動時の荷物の運搬、毎月1回の民族郷からキャンプ地への食料の運搬をする義務があるにもかかわらず、契約通りに果たしてないこと、公司の責任者たちの腐敗などにたいする放牧者やその家族の不満などが表明された。

かつて、狩猟とトナカイ飼育によって、トナカイエベンキ人の生活は成り立っていた。それは経済的な意味だけにおいてではなく、文化的な意味においてもいえるだろう。つまり、狩猟とトナカイ飼育は彼らの経済基盤であり、同時に彼らのイデ

オロギーの基盤でもあった。しかし、中国の政治、経済、文化などへの統合によってトナカイエベンキ人の生活形態は著しく変化し、その文化も失われつつある。また、市場化の力の前ではトナカイエベンキ人だけにトナカイ放牧権を与えるという民族政策も機能しなくなっている。さらに、現在急速に変わって行く中国栄養剤市場に直面しながらも、単なる漢方薬の原材料を売るというトナカイエベンキ人の現状は、受動的で、従属的な立場にあるといわざるを得ない。

4. 危機に瀕しているトナカイ飼育

1999年9月現在、トナカイエベンキ人の中で、19世帯62人が585頭のトナカイを頼って生活を営んでいる。しかし、トナカイ飼育はさまざまな問題に直面している。それは制度上の問題もあれば、トナカイエベンキ人社会がかかえる「深刻な社会問題」の影響からくる問題もある。また、自然環境の破壊や密猟者による被害の問題もある。問題は多岐にわたって存在しているばかりではなく、トナカイエベンキ人社会の全体の問題と深く絡み合って非常に深刻化している。トナカイエベンキ人のトナカイ飼育は危機に瀕していると言わざるを得ない。ここでは、問題点をトナカイ頭数の激減、トナカイ放牧者の後継者不足、アルコール中毒などの社会問題、環境と密猟者の問題という4つの側面から説明する。

①トナカイ頭数の激減とそれによる生活への影響

1992年から1999年9月までの7年にも満たない時間でトナカイの頭数は924頭から585頭まで減少した[7]。できるだけ多くの頭数を維持し、鹿茸の産量を増加しようと努めている放牧者の立場から見て、これは非常に矛盾した結果と言わざるを得ない。表—5が示しているように、1960年代以来トナカイの頭数が600頭以下まで減少したのは今回が初めてである。1980年代半ば以前の減少の主な原因は伝染病、オオカミによる被害や人間による被害（林業局の農薬、密猟者など）などであった。現在と共通する原因が多く見られるとはいえ、人間による被害はこれ程深刻ではなかったし、トナカイを売却するという現象もなかった。

表—5　トナカイ頭数と放牧者数の変化（1961～1999年）

年度	1961	1965	1971	1975	1981	1985	1991	1999
トナカイ頭数	1,083	956	857	942	1,012	883	933	585
放牧者数	103		64		49		34	31

出所：1961年～1985年は民族郷の統計、1991年は陳兆京、1999年は筆者のデータ。

表—6　トナカイ頭数減少の原因（1992年～1999年）

原因	頭数	%＊	備　考
自然災害	34	10%	オオカミ、病気など
被　害	180	53%	罠、農薬、盗難や交通事故など
売　却	118	35%	
食　用	7	2%	
合　計	339	100%	

注:
この表は民族郷の統計を参考しながら、1992年から1999年までの毎年の狩猟民大会の決算表を基本に、筆者の聞き取り調査のデータを使って補正した。
＊減少総頭数に対する割合を示す。

出所:民族郷、狩猟公司、筆者の1999年の調査データ

1992年から1999年9月までトナカイ頭数が減少した原因を大まかに人間による被害、売却と「自然災害」、食用の4つに分類することができる（表—6を参照）。自然災害については、本論の主題と直接関係がないため、詳しい説明はしないが、2点だけを加えれば、地方政府や民族郷の幹部たちには自然災害がトナカイが減少した主な原因であり、それはトナカイエベンキ人の「原始的な」放牧方法によるところが多いと考えられて来た。政府側の統計には、交通事故（事故を起こした人がトナカイをもっていってしまうか、あるいはトナカイが死んで何日が立つと腐乱し解剖しない限り原因は分からないことが多いため）や農薬によって死んだ（これも同じく原因が分かりにくい面がある）トナカイの多くが自然災害として集計されている。このような統計上の誤りは技術の問題よりも行政管理の問題と思われる。つまり、トナカイの死因を自然災害と報告すれば、林業局、民族郷の責任がないからである。トナカイエベンキ人の話によると、自然災害によって減少するトナカイは1980年代と1990年代を比べてもほとんど変化していないようである。人間による被害については、④のところで説明する。ここでは、トナカイ頭数の減少がトナカイエベンキ人の生活に与える影響について説明する。

放牧者の話によると、市場経済の中で鹿茸収入だけで生活を立てるには、1世帯は少なくとも35～50頭ぐらいのトナカイが必要である。しかし、彼らの現状（表—3）から見る限り、3～4世帯以外はほとんどがこの条件を満たしていない。表—3から分かるように、1999年9月の時点で4世帯はトナカイ以外からの収入があったが、他の15世帯はなかった。しかも、この15世帯のうち9世帯が程度の差はあるが、民族郷、狩猟公司、個人から借金しており（一番多いのは29,000元で、一番少ないのが6,000元ぐらい）、さらに、そのうちの6世帯は政府の援助金に頼っている。実は「困難戸」（つまりトナカイももっていないし、仕事もない、政府の援助金で生活している人）と呼ばれている人達の8割以上がかつてはトナカイ放牧者であった。もちろん、このようにトナカイ放牧者の生活水準が低下しているのは、鹿茸収入の減少だけによるものではない。狩猟による収入がなくなったばかりではなく、それにより自分が消費する肉の供給もほとんどできない状態になったことも関連しているし、また市場経済の発展により、彼らの生活費や子供の教育費、医療費などが1980年代初頭と比べて5～6倍も値上がりしている一方、政府の援助金は毎年減っていることなどにもよる。

民族郷の統計データ、1992年から1999年までの狩猟民大会で毎年公布する決算表によると、トナカイを売った収入は1992年から1999年までのトナカイによる総収入（鹿茸とトナカイの売却両方を含む）の約28%を占めている。これはかつてなかったことである。この時期に売却された118頭のトナカイのうち、地方政府、民族郷などの要請（これは主に動物園、内モンゴル自治区50周年記念のイベント、エベンキ自治旗成立40周年祝いなどの目的のため）に応じて売ったのが61頭で、1996年民族郷

がロシアから28頭のトナカイを輸入し、トナカイの群れの「品種改良」を行うために、トナカイエベンキ人のトナカイの群れから調達したのが30頭であり、トナカイ放牧者が自ら（放牧者がトナカイを売る時、狩猟公司の許可を必要とする。この場合は放牧者が先に売る意思を表明し、それを狩猟公司が許可したことを指す）売ったのは27頭である。この118頭を見る限り、30頭は民族郷が「トナカイエベンキ人のためにトナカイを改良する」という名目で強制的に調達したが、ほかの88頭は（一部分は政府の要請に応じたとは言え）放牧者が自分の意志で売ったことになる。トナカイを売却する現象が起きたのは若い放牧者に浸透しつつある「合理主義」と関係がある。彼らから見て、トナカイの自然死亡は「財産の浪費」であり、年とったトナカイや出産できないトナカイは売ったほうが経済的である。しかし、最も根本的な原因は生活のための止む得ない選択と思われる。合理主義的な考え方をもっている放牧者はまだ少数であり、トナカイ放牧の中心になっている中年層の放牧者にとって、トナカイはただの経済的な財産ではない。彼女ら（彼ら）はトナカイに対して深く愛着心をもっており、自分の手で育てたトナカイを自分の手で処分する（売却も含む）のは罪であると考えるからである。もちろん、これは中年層以上の放牧者には市場経済の影響がまったくないという意味では決してない。少なくとも彼らにとって、トナカイ飼育は経済利益以外にも意味をもつのである。したがって、トナカイをめぐって合理主義の考え方と伝統的な価値意識は同時に存在しているとはいえ、市場経済化は伝統的な価値意識を衰退させていることは明らかであり、しかもそれは彼らの止む得ずの選択決定の決め手となっている。

②世代ギャップとトナカイ飼育後継者の不足

表―5はトナカイ頭数の減少を示していると同時に放牧者の減少も示している。トナカイエベンキ人の中で18才以上30才以下の仕事がない人は男女合わせて26人もいるが、キャンプ地でトナカイ放牧を手伝っているのはそのうちの5～6人にすぎない。つまりここでいう放牧者の減少とは他のところで就職した結果、実際の作業の担い手がいなくなったというのとは違い、潜在的な労働力が存在しているにもかかわらず、トナカイ放牧者は不足していることを意味する。現在、トナカイ放牧は50代～40代の女性9人を中心に行われている。20代、30代の人がキャンプ地の人口の過半（表―7を参照）を占めているにもかかわらず、労働の主役にはなっていない。40代以上の放牧者に言わせると「トナカイを彼らに任したら、1年もたたない内にトナカイがなくなる」。1996年から1999年の4年間（夏の2カ月に限る）私がキャンプ地で調

表―7　キャンプ地の年代別の人口構成（1999年8月時点）

	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
人　数	9	7	5	4	6	31
%	29%	23%	16%	13%	19%	100%

出所:筆者の調査データ

査した時、合計23人の若者がトナカイ放牧を手伝っていたが、そのうちの3人がアルコール中毒でなくなり、5人が「軽度アルコール中毒者」となっている。また、彼らが自分のために食用とした（本来トナカイは食用としないのが彼らの伝統であり、40代以上の人はまだそれを守っている）トナカイは7頭にものぼる。さらに、ほとんどの若者はキャンプ地の単調で厳しい生活に耐えられず、民族郷に戻ったら長時間帰って来ない、あるいは忙しい時でも民族郷に帰ってしまうなどのことが起きている。

1999年の時点で35才以下の人は民族郷で生まれ育った人である。1965年に現在の民族郷の場所で、政府はトナカイエベンキ人を定住させるために居住地と民族学校を建設した。最初の人口はトナカイエベンキ人と20人ぐらいの共産党の幹部だけであった。大興安嶺の伐採が奥地へ進むにつれて、民族郷に漢人の移民が急増し、1970年代後半になると総人口の50%以上が漢人となった。党と政府の政治、経済統合、人口構成の変化などによって民族郷の生活、文化は漢化されつつあった。また、学校教育システムの導入により、トナカイエベンキ人の子供たちは、森の中で狩猟とトナカイ飼育のために移動生活をしている両親の側から離れ、民族郷で学校の寄宿生活を送らなければならなかった。1年中で彼らがキャンプ地を訪ねることができるのは夏、冬休みだけとなり、からだでトナカイ飼育、狩猟に接触する機会はほとんどなくなった。一方学校では、漢語で書かれた全国共通の教材が採用され、「国家文化」を教えることを基本方針とした教育を実施したため、教育を通じて自分の民族の歴史、文化、言語などを学ぶこともできなかった。また、国家イデオロギー、主流社会の文化支配の影響下で、彼らの親世代が従事しているトナカイ飼育、狩猟を、彼らは「原始的」、「遅れている」とさえ感じていた。

1997年に私はトナカイエベンキ人出身の12歳から25歳の年齢層の人30人（この年齢層の人口の70%ぐらいを占める）を対象にアンケート調査を行った。ここでは本テーマと多少とも関係ある部分の内容を紹介する。　A.民族郷とキャンプ地のどちらに住みたいか、それを選んだ理由はという問いに回答を求めたところ、下記の結果が得られた。民族郷に住みたい人が22人、キャンプ地に住みたい人が6人、わからないが2人であった。その理由について、民族郷に住みたいと答えた人のあげた理由は主には以下の4つである（a.b.c.dは回答者の多少の順番を表している）。　a.勉強のため、b.テレビが見られる、c.生活が良い（便利、快適、文明などの意味が含まれる）、d.遊ぶところがある（仲間が一緒にいられると言う意味も含む）。キャンプ地に住みたいと答えた人のあげた理由は以下の2つであった。　a.狩猟ができる、b.エベンキ人だから。B1.狩猟とトナカイ飼育についてはどう思うか、B2.その技術をどの程度理解できるかという質問については下記の答えが得られた。B1.　a.わからない、b.男の誇り（狩猟）、c.原始生産方式。B2.　a.あまり技術的な仕事とは思わない、b.狩猟についてはよく分かる、c.あまり詳しくない。

これだけのデータで結論に結びつけることはできないが、このデータとほかの調

査データを合わせて考えると下記のことが言えると思う。若いトナカイエベンキ人はトナカイ飼育が一部の人の唯一の生活源になったにもかかわらず、それについてはあまり関心がなく、放牧の知識もほとんど身につけていないことと、キャンプ地の生活を嫌がり、町の生活をしたがるようになっていることである。

③深刻な社会問題

1957年から1998年までトナカイエベンキ人でアルコール中毒、事故（90%以上が飲酒後の事故である）、自殺によって亡くなった非自然死亡者数は83人である（民族郷1998 ）。これらの現象は1970年代から地方政府や民族郷政府の重要な関心事となり、トナカイエベンキ人の飲酒の制限、酒の販売の制限（1982年まで民族郷の商店は国営の“民族商店”だけであった）、銃の管理を厳しくするなど、いろいろな対策を取ったにもかかわらず、このような現象の蔓延は食い止められなかった。

トナカイエベンキ人社会のアルコール中毒などの問題は主に下記の特徴があると思われる（表—8、9を参照）。 a.アルコール中毒者数は1960年代半ば以後急速に増えており（1965年強制定住が実施された）、1970年代後半からは若い世代や女性に広がる傾向がある。 b.非自然死亡の原因はアルコール中毒が最も多い（事故や自殺もこれと関係がある）。 c.アルコール中毒や自殺によってなくなっている若者のほとんどははっきりした理由が特定できない、などである。トナカイエベンキ人社会に

表—8 トナカイエベンキ人の非自然死亡者数（1957～1998年）

年度	1957～60	1961～65	1966～70	1971～75	1976～80	1981～85	1986～90	1991～95	1996～98	合計
男	2	6	2	7	10	10	11	7	2	57
女	0	0	3	1	3	2	10	6	1	26
計	2	6	5	8	13	12	21	13	3	83

出所:1957～1982年は民族郷の統計、1983～1995年は民族郷公安部の統計による。この間の殺人、獄死に関するデータはすべて地方裁判所の記録による。1996～1998年のデータはすべて筆者の調査による。

表—9 トナカイエベンキ人非自然死亡の分類（1957～1998年）

	アルコール中毒	事故	自殺	その他	計
人数	44	8	9	22	83
%	53%	10%	11%	26%	100%

出所:表—8に同じ
注：事故は凍死、溺死などを指す。その他は殺人、獄死を指す。

起きたこれらの社会現象には深い歴史的、政治的、社会的、文化的な原因があると考えられる。それらについては別の機会に記述、分析したいが、ここではそれらがトナカイ飼育に与えた影響について簡単に紹介することだけにとどめる。アルコール中毒や自殺などによってトナカイ飼育はたくさんの労働力を失っている。特にトナカイ飼育の後継者不足の問題はほとんどこれと関係がある。例えば40代、50代の人の半分以上は飲酒の問題がないのに対して30代、20代の人のほぼ全員に大量飲酒の問題が存在する。また、大量飲酒する風潮が全トナカイエベンキ人社会に蔓延す

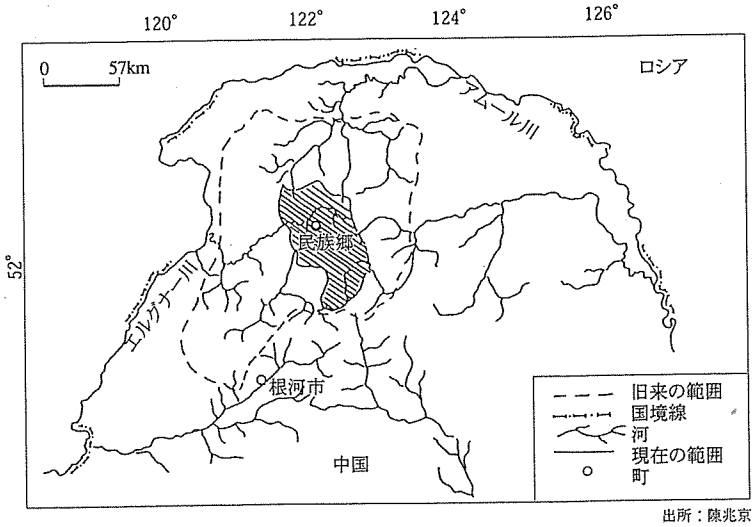
ることによって、半分以上の家庭が父親不在の片親の家庭となり、17人の子供は両親を失い孤児となり、さらに結婚年齢に達した男性青年の約85%がアルコール依存症、精神問題や生理問題（性能力を失っている）をかかえているため、結婚できない状態となっている。さらに、これらの原因により世代間の文化伝承の機能、教育機能などを失い、親と子供のコミュニケーションが成り立たなくなり、社会全体が未来の希望を失い、トナカイ飼育の社会的な意味も失われつつある。

④環境問題と密猟者によるトナカイの被害

1950年代にスタートした大興安嶺の「全面開発」、特に改革・開放政策を導入してから大興安嶺の自然環境は大きく変化しつつある。それは主に下記の原因によると考えられる。林業局が各生産部門に「責任制」を導入してから、各生産部門は環境、社会コストをほとんど無視した利潤の追求に走った。また、現地の住民が自分用の燃料のために森を大量伐採したことや違法に伐採、販売したことなども関係ある。さらに、木材加工、製紙などに使われた汚水を処理しないまま川に流し汚染の原因となり（これは設備の老朽化と資金不足と関係あると言われている）、大興安嶺のあちこちに点在する違法の砂金採掘も川を汚染している（水銀が使われている）。

自然環境の変化は自然生態を頼って放牧を行っているトナカイエベンキ人に、主に下記の問題をもたらしている。1つはトナカイの放牧範囲が縮小した問題である。根河市林業局の資料によると、トナカイの放牧範囲は1950年代以前は800万ヘクタールであった。1980年代になると、300～250万ヘクタールまで減少した。さらに、1990年代になると、70～50万ヘクタール（50～30万ヘクタールという説もある）までに激減した（図—5を参照）。トナカイエベンキ人の話によると、これらは町、組織、

図—5　トナカイ放牧範囲の変化（1950年代と1990年代との比較）



出所：陳兆京

村、畑など「人間的な」ものの増え過ぎと定住化によって遠くへ移動できなくなったことなどと関係がある。また林業局の伐採による、原始林の面積の激減にも関係している。トナカイの主食であるコケ類は原始林ほど多く生えているため、森林面積が縮小しなくでも、コケ類が破壊されると放牧地として使用できないからである。もう1つは森の生態系が破壊された問題である。林業局は木材を早く成長させるために大きな木の周囲の幼木や潅木を切り取る。また、虫害を防ぐために農薬を撒く。これらの行為は森林の生態系に影響を与え、それが再びトナカイのエサに影響する。あるいは農薬のかかった枝、コケなどをトナカイが食べて死ぬ事件も多発している。さらに機械による伐採は森のコケ類などの下位植物に直接ダメージを与えている。トナカイエベンキ人の話によると、コケ類は成長が遅く、回復能力が弱い。コケ類の生存可能な環境が残ったとしても、その回復は5～7年もかかるそうである。近年トナカイが秋になっても充分な栄養を身につけられず、冬を乗り越えることができないケースが出ていると言われている。50代の女性の放牧者は、このような現象は昔は一度も起こったことがない、これは明らかに生態環境の変化と関係があると見ている。

この地域において、市場経済の発展は人々の食卓を豊富にしたと同時に「野味」に対する関心をたかめた。根河市の供銷社のデータと1997年の私の現地調査によって得られたデータからみると、1980年代前後では1頭のヘラジカは200～300元（肉と皮全部を含む）で売られていた。1990年代に入ってから、ヘラジカの鼻（中華料理では最もおいしいものの1つといわれている）だけで5,000～7,000元する。もし秋に捕ったものなら、1頭のヘラジカは3万元もすると言われる。密猟を15年もやっている1人の漢人男性の話によると、密猟者が捕った獲物を買うのは、現地のレストラン、旅館などはもちろんのこと、遠く広州、上海、温州、青島などからもわざわざ買いにくるそうである。漢方薬を知識体系として構築された中華食文化には「野味」を好んで利用する、食べるという習慣は根深くあると思われる。現地では、野生の動物、鳥、植物（朝鮮人参、万年茸など）は親戚、上司、友達に送る最高のお土産と見なされ、旧暦の正月の宴や客を招いて食事をする時に欠かせない定番料理となっている。

しかし、その被害を受けているのは野生の動物や植物だけではない。被害はトナカイの群れにも及んでいる。1992年から1999年までの間に、密猟者、林業局の社員、町の住民などの罠、野生動物を殺すために撒いた毒、盗難事故、交通事故、そして林業局が虫害を防ぐために撒いた農薬などによるトナカイの損失は180頭にものぼる（この時期のトナカイの減少の53%を占める。表—6を参照）。これはトナカイエベンキ人のトナカイによる7年分の総収入に相当するものである。それだけではない。新しい場所に移動する度に、「罠、毒と農薬の掃除」にたくさんの労働力、時間を費やさなければならない。

このように市場経済がもたらした大衆消費文化と漢人の医、食にかかわる「伝統慣習」とが結び付くことによって、多くの動物、植物は絶滅の危機に追いやられ、生態系にも大きなダメージを与えているばかりではなく、トナカイエベンキ人が飼っているトナカイも直接、間接にその被害の対象になっているのである。

おわりに

かつて、トナカイエベンキ人社会は狩猟、トナカイ飼育によって成り立っていた。彼らの分配慣行、シャマニズム、その他の習慣、文化、いわゆる「上部構造」もその生業経済の基盤の上に構築され、また「上部構造」自体が生業経済を維持する機能をも果たしていた。経済と社会の一体性は彼らの生活の1つの特徴であった。つまり、経済活動は文化的にも意味をもっていた。1年のサイクルは「角（トナカイ）こよみ」によって構成され、もっと短い時間のサイクルは狩猟によって規定されていた。信仰、儀礼、神話、口承文学などすべてがトナカイ飼育、狩猟と関係していた。移動生活は彼らの基本的な生活のスタイルであり、彼らは自然、動物のリズムに合わせた生活を送っていた。物質的な「貧乏」、移動の自由、互いに助け合う精神と平等主義がこの社会の特徴であった。彼らの自己主張である「エベンキ」というアィデンティティもこのような精神を含むものと言える。しかし、国家、地方の政治への統合によって彼らの社会制度は崩壊し、彼らの生業経済も社会主義経済システムに組み込まれ、地方政府の計画、指令によって動くものとなった。また、学校教育システムの導入、国家イデオロギーの影響、漢人移民の急増による人口構成の変化などによって、伝統文化が「排除すべきもの」として扱われたばかりではなく、トナカイエベンキ人社会内部での細分化や民族郷とキャンプ地との対立というさまざまな矛盾を生じさせ、それらがまた伝統文化の継承の障碍となり、世代ギャップを生み、精神的な混乱をもたらしている。

トナカイエベンキ人社会が国家統合によって著しく変化したことは、トナカイ飼育が直面しているさまざまな問題の背景でもあり、原因でもある。トナカイ飼育が抱えている問題は国民国家の政治、経済、社会への統合によって、トナカイエベンキ人社会の従来の生活形態が崩壊したことと直接に結びついている。また、統合と保護を同時に進めてきた民族政策は、市場経済という新局面に対応がおくれ、あるいは機能しなくなり、権力によって維持された秩序も乱れが見られ、さらに、新しい矛盾を伴った市場経済の発展は旧来の問題を暴露させただけではなく、より悪化させる結果となった。

「はじめに」で紹介したオロチョン民族が狩猟生活をやめた（実際はやめさせられた）という記事から、これらの民族にたいして国家が一貫して主張してきたある民族政策の理念が分かる。これらの民族が従事してきた経済活動は長い歴史をもつとは言え、マルクス主義の「歴史発展論」から見て、さらに近年の「持続的な」自然資源

の利用という視点から見ても、「遅れている」と言わざるを得ないことになる。このような社会に定住と農業を導入したことは、彼らにとって「文明化」であり、「歴史的な進歩」である。中国で「森林民族」と呼ばれているエベンキ民族、オロチョン民族などが長い時間をかけて自分の生活上の経験から生み出した、森林の生態にうまく適応した独特の文化は、国家の側からは一度も評価されたことはなかった。1940年代後半以降、これらの民族が住んでいる地域の国家統合が進み、そのプロセスの中で彼らが「原始社会」というレッテルを貼られてから、これらの民族は自分の生き方、歴史、文化を主張する場を失った。

ホロンバイル盟地域において、さまざまな開発の問題に直面しているとはいえ、モンゴル人、エベンキ人（南方）、ダフール人などの牧畜民には「ノドグ」（故郷、放牧地、土地などという意味のモンゴル語）があり、漢人の農民には「土地」、「山林」がある。新しい「土地法」や「草原法」などに基づいて、それを「承包」することができ、経済的な利益につながるだけではなく、それに対する執着は彼らのアイデンティティと結び付いている。しかし、トナカイエベンキ人にはそれが欠けている。彼らにこのような概念が歴史的に欠如しているとは思わない。かつて、アムール川の南の岸から大興安嶺北西部にかけて、約600万ヘクタールの範囲が彼らの生活領域であり、猟場とトナカイ放牧地であった。土地にたいする所有意識はもたなかったが、各キャンプ集団はそれぞれ自分の猟場を占有しており、その意識も強かったと言われている（思 2000 ）。また、森の中には“岩画”（2～3カ所ある）、山、大きな木、奇異な形をしている岩、川などたくさんの聖なる場所があり、それが彼らの信仰、習慣、そして生活とつながっていた。いずれにせよ、彼らは私たちの想像以上に森と密接に結ばれていた。1940年代後半、この地域が国家に統合され、さらに1950年代から大興安嶺の「全面開発」が実施され、森林が国有化されることによって、トナカイエベンキ人は自分の「イリンテンチュー」（家、家園）を失った。彼らは新しい定住地に移住させられてから、林業局にたいして、自分のトナカイ放牧地を要求し続けて来たが、それはいまもなお許可されていない。国家の民族政策によって1965年にスタートした民族郷は、トナカイエベンキ人に「自治地域」を与え、「自分の文化、習慣、経済を発展させる自治権」を享受するはずであった。政治統合、人口構成の変化やこれらによる民族郷政府の機能転換によって、それは形だけのものになりつつある。

トナカイエベンキ人社会にとって、未来は一本の道しかいない。それは自らが主流社会へ同化することである。トナカイエベンキ人は自分の言葉で国民教育を受けることができない（それは単に文字をもたないというだけの理由では説明し切れない）。シャマニズムも存続不可能である。中国政府はシャマニズムを宗教として認めていない。中国の分業概念上には農業、牧畜業、手工業などは存在するが、狩猟業やトナカイ飼育業は存在しない。トナカイエベンキ人の狩猟、トナカイ飼育は、生業経済としてはその道をすでに閉ざされているのである（少なくともいまの体制下では

そうであろう)。1950年代からトナカイエベンキ人は政府や主流社会から「狩猟民」と呼ばれて来た。しかし、「狩猟民」と「農民」や「牧畜民」とは決して同じカテゴリーではない。それは以下の2つの意味においてである。改革・開放時代以降、中国では「現代農業」、「現代牧畜業」などの概念が認められるようになったため、農民、牧畜民は急速に市場経済化していく中国社会の中でも自分の位置を見つけることができる。むしろ戦略的に重視されているとさえ言える。農業、牧畜業、特に農業は、狩猟やトナカイ飼育をする人々が到達すべき発展モデルである。かつてこのような考え方は「歴史進化論」によって説明されてきたが、現在はさらに「環境保護」という新たな視点を取り入れて、ますます説得力がある言説となっている。

中国語の「発展」ということばは政治、経済、歴史、文化、社会、自然界すべてを総合する概念である。この概念はマルクス主義のソ連経由の「輸入品」とはいえ、権力と結び付いた支配的な言説になったばかりではなく、「真理」と奉じられた知識体系の最も基本的理念の1つにもなった。この概念によって中国の共産党、政府が、中国の各民族を発展させ、「中華民族」を作り上げるという目的が正当化された。一方、少数民族固有の文化やアイデンティティは、発展の障害となる否定的なものと見なされ、先進的な文化を導入し、遅れた諸要素を「近代的」なものに容赦なく変容すべきだとされた。近年になって、「持続的な発展」という方針を導入し、一部の「開発計画」を停止した。しかし、これは国の利益から考えた結果であり、現地の人達の利益を尊重したものではない。「発展」という理念はいまなお動揺せず維持され続けている。

注:

[1] 詳しいことは思 2000を参照。

[2] 人間がトナカイに与えるものは塩だけである。これもエサよりもトナカイの群れを管理する手段として、例えばトナカイを呼び戻す時、掴む時に利用される。

[3] 主に密猟者の罠による被害、交通事故、盗難を指す。

[4] しかし、4～5年前まで、2才、3才になった牡トナカイの去勢が行われるために、キャンプ地の男たちにとって10月は忙しい時期であった。近年鹿茸のために去勢をほとんどやめた（去勢されなかったトナカイの角は大きくなる)。

[5] これも近年に起きた現象であり、彼らの生活の変化を表している。11月の後半、あるいは12月の上旬から次の年の3月まである場所で留まり、移動しないことをいう。このような場所を探すには少なくとも水場が近いことと、トナカイのエサが豊富であることという2つの条件が必要と言われている。

[6] トナカイエベンキ人の人口のうち、幹部、社員というカテゴリーに入っていない人々を指す。詳しいことは思 2000を参照。

[7] 1992年の数字は民族郷の統計により、1999年の数字は筆者の同年の調査による。

引用文献:

B.A.トゥゴルコフ 『トナカイに乗った狩人達』 1981年 刀水書房

今西錦司編『大興安嶺探検』1991年　朝日新聞社

永田珍馨　『北方騎馬民族オロチョン』1969年　毎日新聞社

大塚和義　『草原と樹海の民』1988年　新宿書房

思沁夫　「中国トナカイエベンキ人の社会経済変化一」金沢大学大学院社会環境科学研究科『社会環境研究』第4号　1999年　P.161～170

思沁夫　「中国トナカイエベンキ人の社会経済変化二」金沢大学大学院社会環境科学研究科『社会環境研究』第5号　2000年　印刷中

シロコゴルフ　『北方ツングースの社会構成』 1941年 岩波書店

朝克　「鄂温克母語是我們宝貴的財富」、烏熱爾図編 『述説鄂温克』 1995年 遠方出版社

陳兆京　『馴鹿群的現状調査』 1993年 根河市林業局

鄂倫春研究会編 『新生之路』 1996年 鄂倫春研究会

哈赫爾　「統一鄂温克民族族称座談会記実」、鄂温克研究会編『鄂温克族研究文集』1991年鄂温克研究会

呼倫貝爾盟民族事務局編　『呼倫貝爾盟民族誌』 1999年 海拉爾市文化出版社

李時珍　『本草綱目』 1995年 重慶大学出版社

民族郷資料室　『档案匯編』 1998年

民族郷　『民族郷社会問題対策報告書』 1998年

内蒙古自治区編輯組『鄂温克族社会歴史調査』1986年　内蒙古人民出版社

(中国語の文献は中国語のアルファベット順に並べた)